

石田波郷の句碑を巡る⑤ ～垣生中学校～

校長 玉井 啓二

松山市内には、本校の卒業生で昭和を代表する俳人である石田波郷の句碑が数基設置されています。本年度は、それらを巡り、句碑に記されている波郷の俳句を鑑賞しています。今回はその第5回目で、松山市立垣生中学校に設置されている句碑を紹介します。(第1～4回目については、本校のホームページの「校長室より」に掲載していますので、そちらを御覧ください。)

右の写真の句碑は、垣生中学校の正門から直進してすぐの校舎に沿って左折した所、玄関の手前で見ることができます。そして、この句碑に記されているのが次の俳句です。

すずめ

雀らも海かけて飛べ吹流し

ふきなが

石田波郷



この俳句の季語は「吹流し」。夏(初夏)の季語です。吹流しは、鯉のぼりと一緒に飾られる五色の長い帯状の布ですが、鯉のぼりそのものを指すこともあるようです。この句は、1943年(昭和18年)に詠まれて

いて、句集「風切」に収められています。本年度5月7日に本ホームページに掲載した「石田波郷の句碑を巡る① ～持田町1丁目～」で紹介したように、波郷は1943年(昭和18年)9月に召集を受けて千葉佐倉連隊に入隊し、10月には中国の山東省に渡っていますので、この句は出征する前の初夏に詠まれたものでしょう。

この俳句は、「威勢のいい吹流しに負けずに、雀たちも元気に海をかけて飛んで行け。」と呼びかけています。当時は戦時下にありましたから、戦意高揚や国威発揚を意識し、吹流しの勢いを雀らに託すような勇ましさ(戦地に向けて飛び立って行けといったところか。)を表しているという解釈も可能でしょう。一方で、「吹流し＝波郷自身」、「雀ら＝子供たち」と擬人化し、「私は今、懸命に句作をしている。子供たちも元気に勢いよく未来に向かって行きなさい。」と子供たちを激励しているというような解釈も可能でしょう。ここでは、後者の擬人化に基づいた解釈に沿って、子供たちのことを詠んだ句として論述を進めることにします。というのも、波郷が子供のことを詠んでいる句との共通性が、この句に見て取れるからです。

例えば、波郷が子供たちのことを詠んだ句として、昨年度の11月4日に本ホームページに掲載した「『俳句の小径』の石田波郷の二句～子供に注ぐ波郷の眼差し～」で紹介した次の二句を見てみましょう。

ほたる

をさな等は海に蛍につかれ寝る 石田波郷

あおりんご

青林檎子が食い終る母の前 石田波郷

先の句では野山や海川で遊ぶ子供たちの様子が、後の句では子供が林檎にかじりついている様子が詠まれています。いずれの句にも、子供のもつ元気さや勢いといった強いエネルギーが感じられます。そして、このような子供が発するエネルギーは、「雀らも……」の句からも同様に感じられます。



本年度5月7日に本ホームページに掲載した「石田波郷の句碑を巡る① ～持田町1丁目～」で記述したように、波郷の句には、難病や戦争のために希望を断念せざるを得ない無念さやつらさという〈負の感情〉が表れたものが多くあります。しかし、子供のことを詠んだ波郷の句には、共通して優しさや温かさ、明るさといった〈正の感情〉が感じられます。それは、青年期を戦中・戦後の混乱の中で過ごし、難病を患って亡くなるまで闘病生活を送っていた波郷にとって、数々の夢や希望は断念せざるを得なかったに違いなく、そのような自身の夢や希望を投影して託すことができたのが、おそらく子供たちであったからでしょう。「雀らも……」の句は、出征前、難病を患う前に詠まれています。その当時の波郷にとって子供は未来を切り開いていく〈希望の光〉であったことがうかがえます。ですから、子供に注ぐ波郷の眼差しは、いつも変わらず柔和であったことでしょう。このように想像を膨らませると、「雀らも……」の句は、〈希望の光〉である子供たちへの激励と思えるのです。